

なごや生きもの一斉調査 2025

カエル編

調査結果報告書

実施日 2025年5月1日(木)～6月30日(月)

調査場所 名古屋市内483地点



なごや生きもの一斉調査2025 ～カエル編～ 調査結果報告書

発行：なごビオ(なごや生物多様性保全活動協議会)

(事務局：名古屋市環境局なごや生物多様性センター内)

〒468-0066 名古屋市天白区元八事五丁目230番地 TEL:052-831-8104 FAX:052-839-1695

監修 藤谷武史(名古屋市東山動物園)

編集 なごビオ事務局



2026年3月発行

主催

なごビオ(なごや生物多様性保全活動協議会)



監修

藤谷武史
(名古屋市東山動物園)

目次

1. 概要	1
1-1 目的	
1-2 実施体制	
1-3 ワーキンググループ	
2. 実施内容	2
2-1 調査日時	
2-2 調査地点	
2-3 参加者数	
2-4 一斉調査の流れ	
3. 調査結果と考察	4
3-1 概要	
3-2 各カエルの結果	6
3-3 生息地と環境	17
3-4 ポテンシャルマップ	17
3-5 総合考察	19
3-6 調査後のアンケート	22
4. 調査資料（なごやのカエル図鑑）	24
5. 活動アルバム	30



ヌマガエル

1. 概要



1-1 目的

なごビオ(なごや生物多様性保全活動協議会)は、なごやに生息する生物及びその環境の継続的な調査を行い、生物多様性の現状を把握するとともに、外来生物の防除など身近な自然の保全を実践することを目的として、平成23年5月15日に設立されました。令和8年3月末現在、72の会員(団体会員42、個人会員29および名古屋市)により構成されています。

なごビオでは、その活動の一環として、1年に1回、なごや生きもの一斉調査を実施しています。令和7年度はカエルを対象として一斉調査を行いました。調査する意義は次の3つです。

- (1) 市内全域でのカエルの調査は初めてです。生息状況調査が不十分のため情報不足となっていたカエル類について、市内に生息するカエルの分布状況が把握できるとともに、カエルが生活できる水田をはじめ水辺環境が都市化により減少しているなど、環境の変化を見るのにカエルの調査は適しています。
- (2) 特定外来生物に指定されており大型で捕食性の強いウシガエルは、生態系への悪影響が懸念されます。ウシガエルなどの外来生物が引き起こす環境問題について考える機会となります。
- (3) 自宅周辺や身近な場所でカエルの生息状況を調べることで、身のまわりの自然環境に興味をもってもらう機会を提供します。また、様々な環境に多様な生きものが生息していることを知っていただき、生物多様性について学ぶきっかけを提供します。

1-2 実施体制

今回の一斉調査の実施体制は以下のとおりです。また、名古屋市東山動物園の藤谷武史氏に監修をお願いしました。

- 【主 催】なごビオ(事務局：名古屋市環境局なごや生物多様性センター内)
【監 修】藤谷武史(名古屋市東山動物園)

1-3 ワーキンググループ

今回の一斉調査では、なごビオの両生類部会、両生類の専門家、データベースの専門家で構成するワーキンググループを設置し、調査場所の選定や調査方法の検討を行うとともに、調査結果をまとめ報告書を作成しました。

- 【構成メンバー】藤谷 武史(両生類部会部会長/名古屋市東山動物園/尾張サンショウウオ研究会)
橋本 啓史(生物情報モニタリングデータベース部会部会長/名城大学准教授)
市岡 幸雄(両生類部会/尾張サンショウウオ研究会)
水谷 康一(両生類部会/尾張サンショウウオ研究会)
渡辺 滋子(両生類部会/尾張サンショウウオ研究会)
春日 凜瞳(名城大学野生動物生態研究会)
事務局(名古屋市環境局なごや生物多様性センター)

【ワーキンググループ会議の実施状況】

令和6年11月22日、12月18日、令和7年1月15日、2月19日、3月13日、4月11日、6月25日、8月28日、11月19日 の全9回

2. 実施内容



2-1 調査日時

【日程】2025年5月1日(木)～6月30日(月)

2-2 調査地点

名古屋市内483地点

内訳は、一般参加者による調査が340地点、ワーキンググループと学生による調査が143地点でした。うちカエルが確認できた地点は303地点でした。

2-3 参加者数

調査への登録者は313人で、調査結果を投稿いただいた方は126人でした。

2-4 一斉調査の流れ

(1) 事前準備

参加者は一般公募で募りました。これまでの一斉調査とは異なり、生体を採集せず、鳴き声を録音したり、写真を撮影して送信してもらう方法で行いました。参加者には、調査前に、「調査の手引き」、「なごやのカエル図鑑」、「カエル一斉調査 記録送信方法」をお送りし、よく読んで調査を実施してもらいました。

(2) カエル学習会

なごビオ会員を対象になごやのカエルの状況や生態についての学習会を4月14日(月)に実施しました。学習会ではカエルの生態やなごやのカエルの現状について学びました。

参加者数は23人でした。



カエル学習会の様子

(3) カエル観察会

参加者を対象に身近な自然や生きものに関心をもってもらうため、なごビオ会員の協力を得て、緑地や水田でカエル観察会を9回開催しました。

一般の参加者 52人、なごビオ会員 31人、スタッフ 13人 計96人

【協力団体】 相生山緑地自然観察会、なごや東山森づくりの会、花水緑の会、名東自然倶楽部、両生類部会員 鵜飼普



相生山緑地(天白区)



市民水田(港区)

(4) 調査方法

調査の流れは①～④のとおりです。

- ① 参加者は「調査の手引き」に基づいて、調査期間中に、名古屋市内でカエルの鳴き声を録音したり、写真を撮影する。
- ② Googleフォーム「カエルの記録」に入力して事務局に報告する。
 - ・ 観察年月日 ・ 観察時刻 ・ 観察場所(緯度経度)
 - ・ 観察した環境(主要な環境、近くの環境) ・ 観察したカエルの種類
 - ・ 観察状況(自由記述) ・ 写真や音声のファイルを添付
- ③ 報告された写真や音声データをワーキンググループ内で解析する。
- ④ 観察場所の緯度経度を3次メッシュマップ上に生息分布として反映する。

(注) 今回の調査では調査対象期間に鳴き声を録音してもらい、その鳴き声から種同定して分布調査を行いました。鳴き声の判別で難しい場合は複数人で確認するようにし、明らかにカエルの鳴き声でない場合は調査結果から除きました。鳴き声以外にカエルの生体写真からも生息分布に反映させました。

(5) 追加調査

これまでカエルの存在を確認していたにも関わらず、参加者から報告がない地点や水分分布図と航空写真を組み合わせ、カエルがいそうな143地点をピックアップし、追加で調査しました。

調査期間は7月1日(火)～7月31日(木)で、ワーキンググループと名城大学野生動物生態研究会で行いました。



ヒガシニホンアマガエル

3. 調査結果



3-1 概要

調査参加登録者は313人で、このうち実際に調査結果を投稿いただいた方は126人でした。投稿いただいた調査地点は340地点で、うちカエルの鳴き声ないしは生体の写真があった場所は269地点でした。追加調査として、8人で143地点を調査した結果、カエルが確認できた地点は34地点でした。以上の合計で483地点(図1)を調査し、このうちの303地点でカエルが確認されました(図2)。

調査で確認された種類は10種類で、アズマヒキガエル、ヒガシニホンアマガエル、ヌマガエル、タゴガエル、ニホンアカガエル、トノサマガエル、ナゴヤダルマガエル、ツチガエル、ウシガエル、シュレーゲルアオガエルでした(図3)。名古屋市内ではこれら以外にモリアオガエルが確認されていますが、今回の調査では確認されませんでした。モリアオガエルは国内移入種で自然分布ではないため、近年は確認されなくなった可能性が考えられます。今回の調査は、市内で観察されるカエル類をほぼ網羅した結果でした。

アズマヒキガエルやニホンアカガエルについては、調査期間中が非繁殖期であったため、音声では確認できず、写真での確認のみでした。

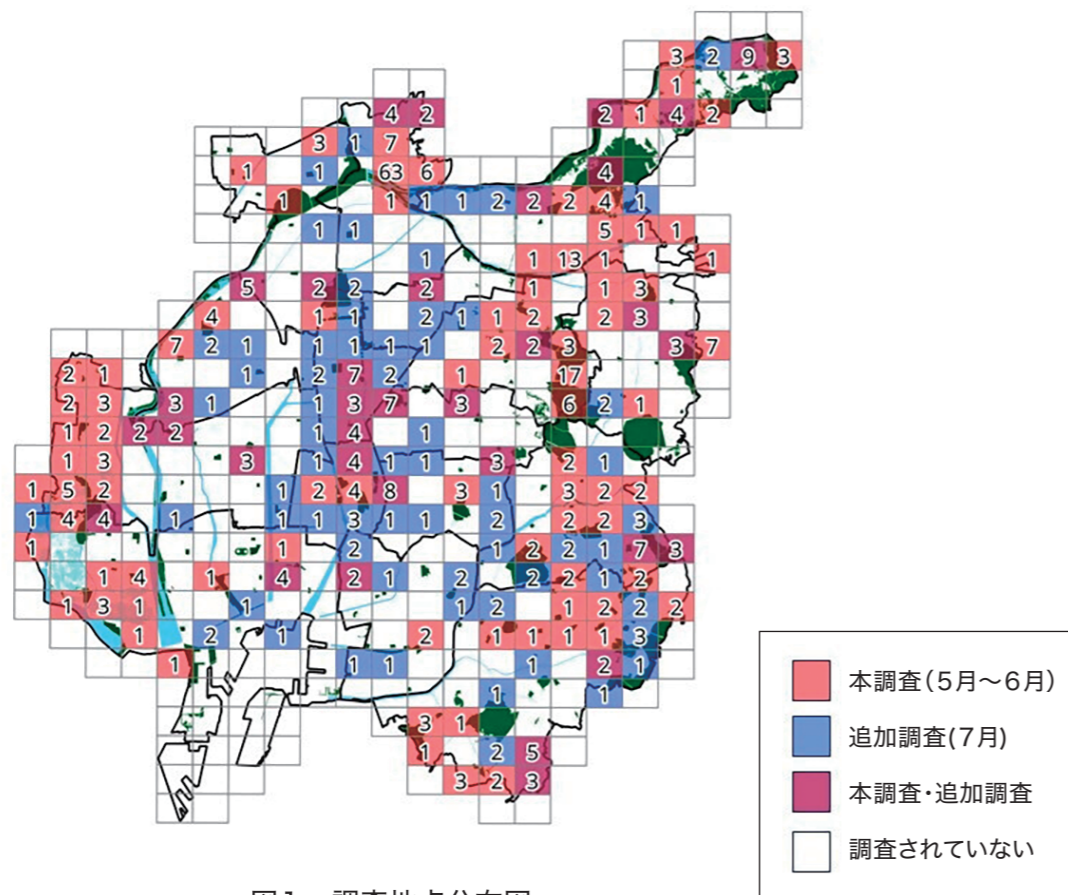


図1 調査地点分布図
(数字は調査回数)

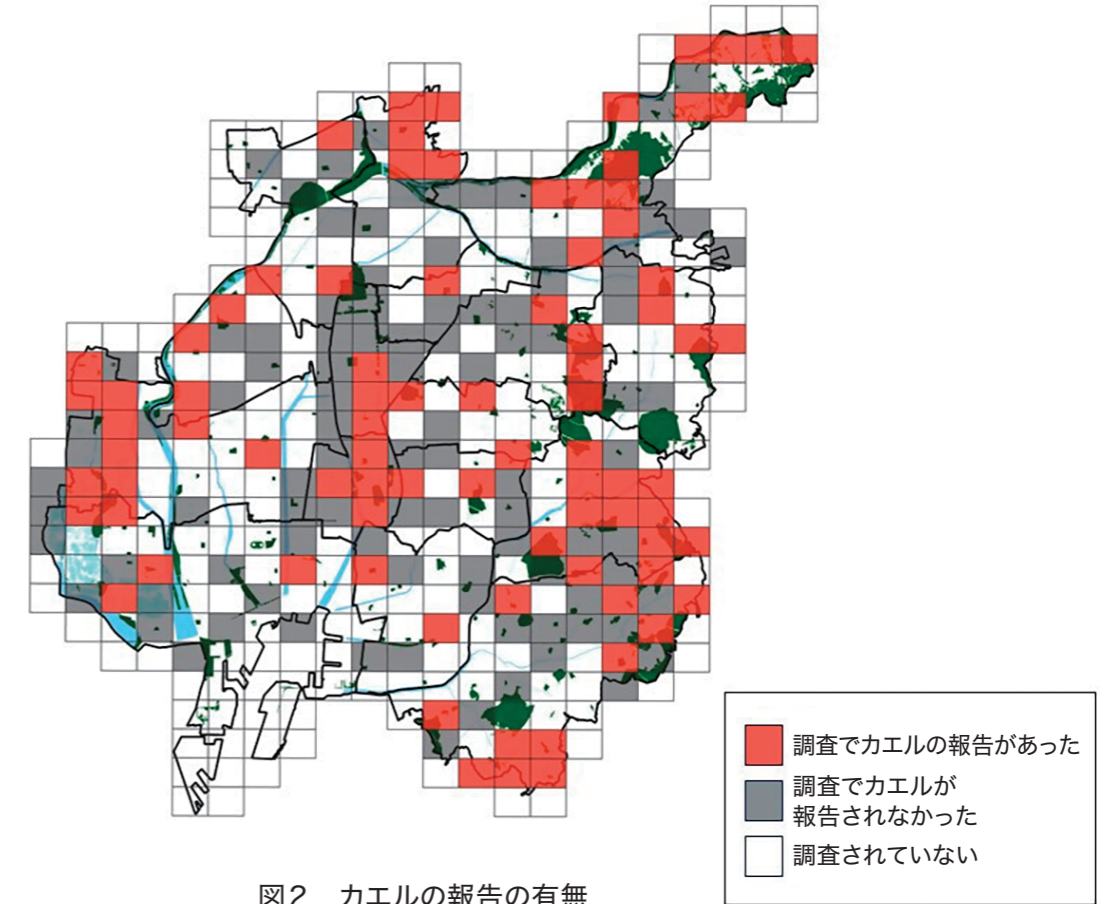


図2 カエルの報告の有無

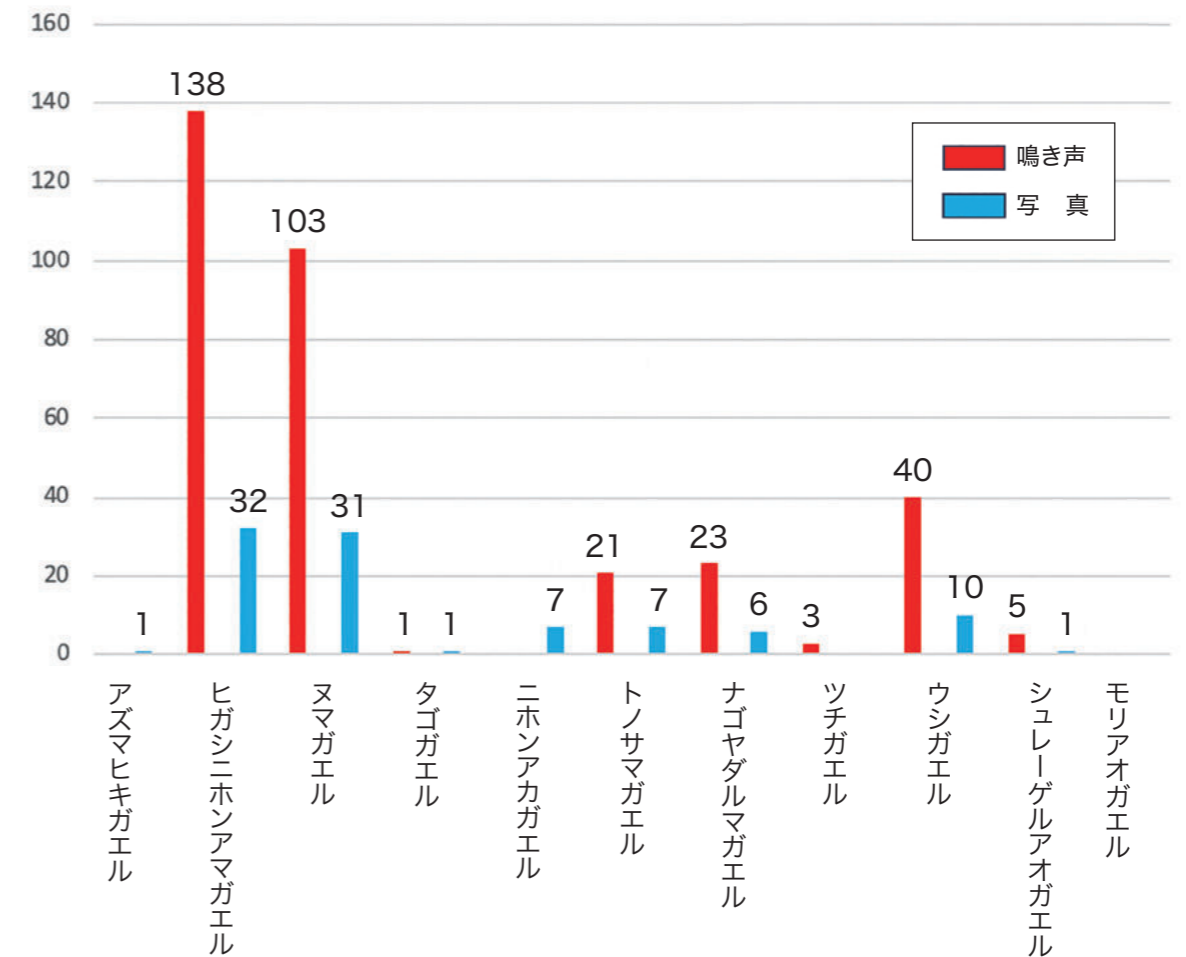


図3 投稿数

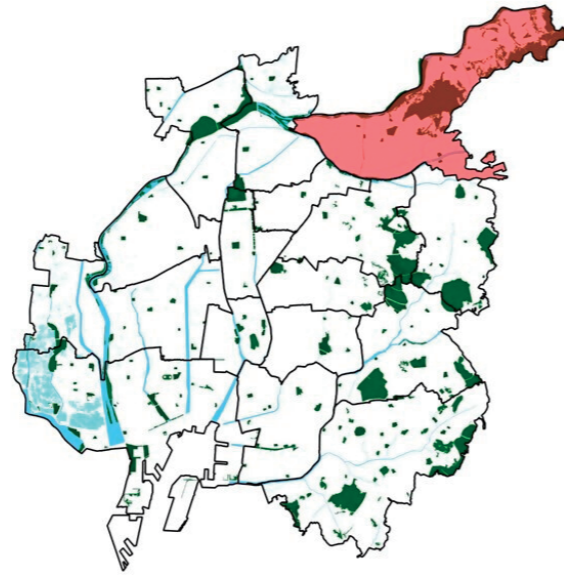
3-2 各カエルの結果

a アズマヒキガエル (名古屋市版レッドリスト2025 絶滅危惧ⅠA類)

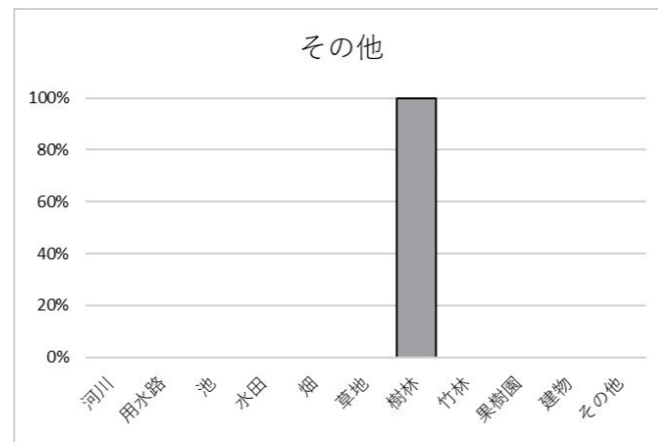
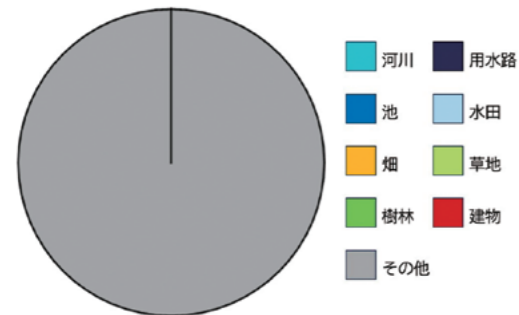
早春に繁殖するため、今回の調査期間では鳴き声の投稿はありませんでした。写真の投稿によって、守山区の一か所のみから報告されました。調査終了後、参加者からいただいた情報をもとに、緑区で成体を確認しました。市内では他に数区で生息が確認されていますが、近年急激に生息数が減少傾向にあり、今回の調査結果も、それを裏付ける結果となりました。本種は名古屋市版レッドリスト2025に初めて絶滅危惧Ⅱ類にランクインし、2020年版では絶滅危惧ⅠAにランクアップされています。



(ワーキンググループ撮影、調査期間外、2024年、岐阜県御嵩町)



確認場所



報告地点の周辺環境

※円グラフは報告地点の環境を、棒グラフは報告地点の環境別に報告地点周辺あった環境(複数回答可)を示す。

b ヒガシニホンアマガエル (名古屋市版レッドリスト2025 情報不足)

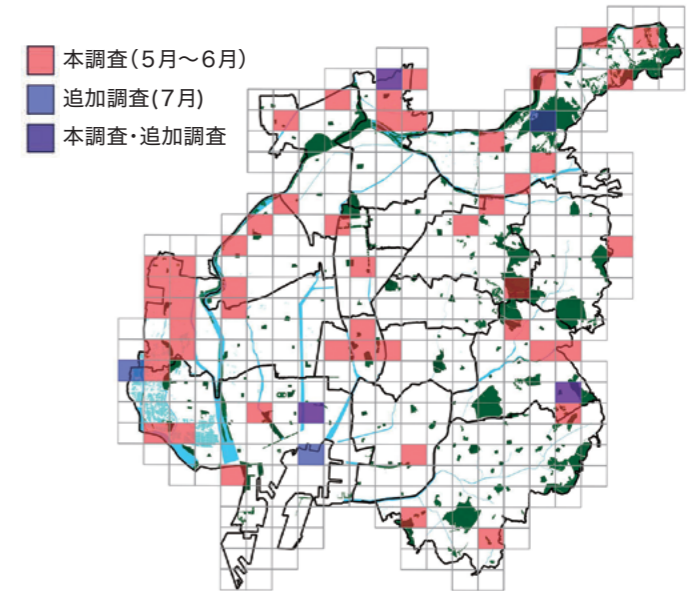
ニホンアマガエルから独立して2025年2月に新種記載されました(Shimada et al.,2025)。西日本に生息するニホンアマガエルとの境界線は、福井県西部から京都府、大阪府、和歌山県北部から奈良県南部、三重県南部にあり、境界線あたりで交雑が確認されています。

市内では生息調査が不十分であったため、名古屋市版レッドリスト2025で情報不足とされていました。しかし、今回の調査では、鳴き声の投稿件数が最も多く、昭和区以外の全ての区で生息が確認され、本種の市内における生息状況の把握が大きく進みました。繁殖期は春から夏と長く、鳴き声も非常に特徴的で聞き取りやすく、非繁殖期にも単発的に鳴くことがあるため、最も鳴き声に親しみのあるカエル類と思われる。

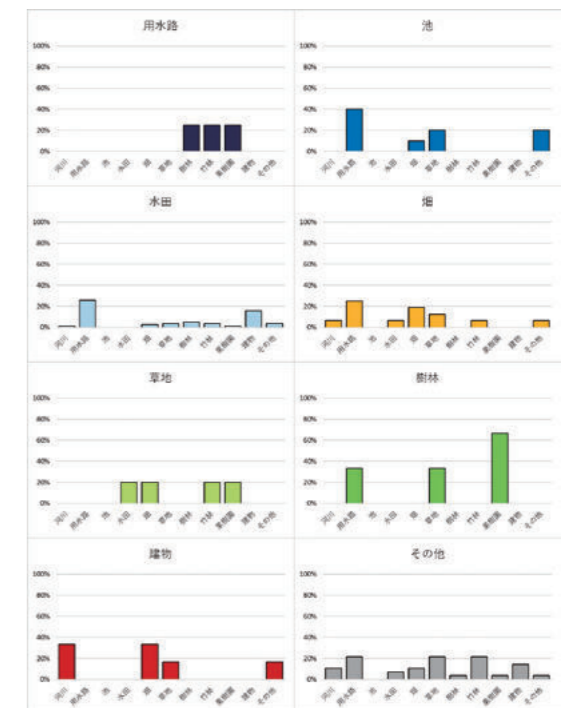
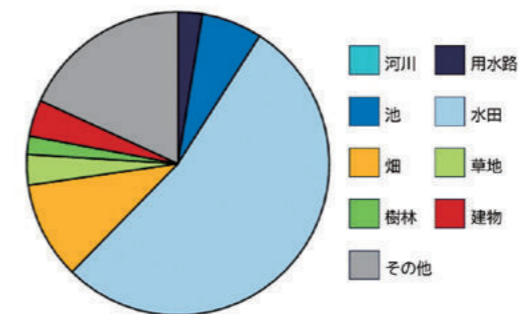
瑞穂区のプール内で繁殖が確認されました。繁殖が数年前から確認されており、この場所では本種の遷移力の高さがうかがえます。一方で人為的移入が起こりやすい種でもあることから、十分に注意をする必要があると思われます。



(参加者の方が撮影)



確認場所



※円グラフは報告地点の環境を、棒グラフは報告地点の環境別に報告地点周辺あった環境(複数回答可)を示す。

報告地点の周辺環境

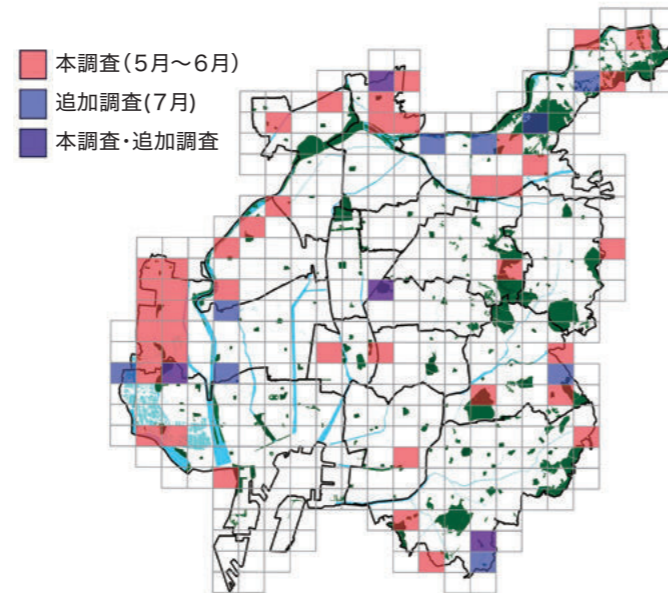
c **ヌマガエル** (名古屋市版レッドリスト2025 ランク外)

東区と中区を除く全区で生息が確認され、これはヒガシニホンアマガエルと類似する結果でした。鳴き声の投稿件数もヒガシニホンアマガエルに次いで多かった種類でした。本種は遷移力が非常に高く、新たな湿地環境にいち早く定着することが観察されています。ただ、ヒガシニホンアマガエルに比べると水辺から離れることに弱く、遷移するには河川などの水辺が必要と思われます。

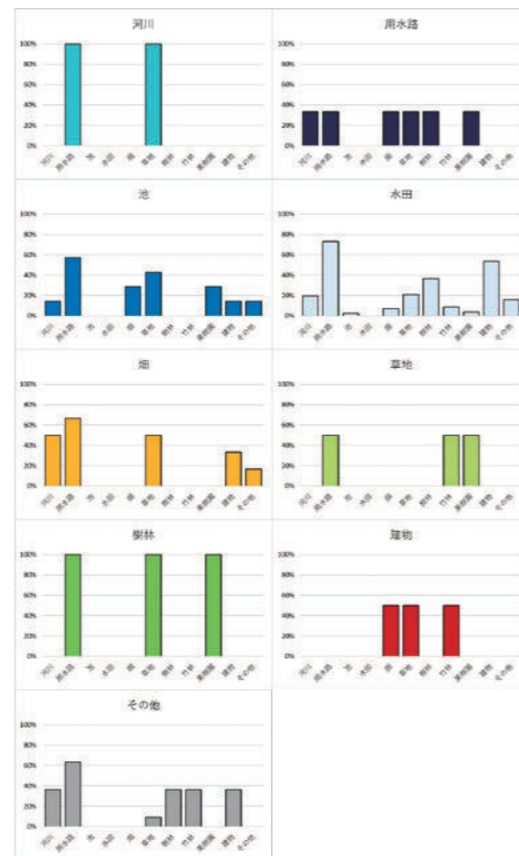
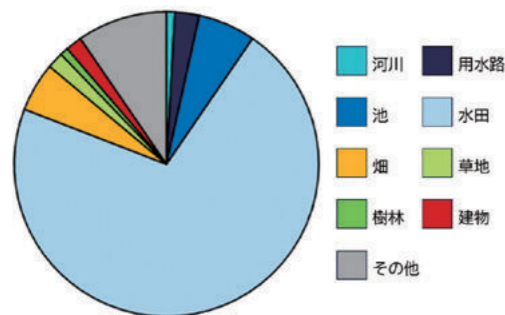
ヒガシニホンアマガエルと同様に、繁殖期が長い種です。調査期間前後が繁殖期に当たっていたため、鳴き声が顕著に聞かれました。また、遷移力が高く湿地環境を好むことから、濃尾平野の水田では必ずといっていいほど本種が生息しています。そのため、市内の生息分布は水田の分布とほぼ重なるものでした。



(参加者の方が撮影)



確認場所



※円グラフは報告地点の環境を、棒グラフは報告地点の環境別に報告地点周辺あった環境(複数回答可)を示す。

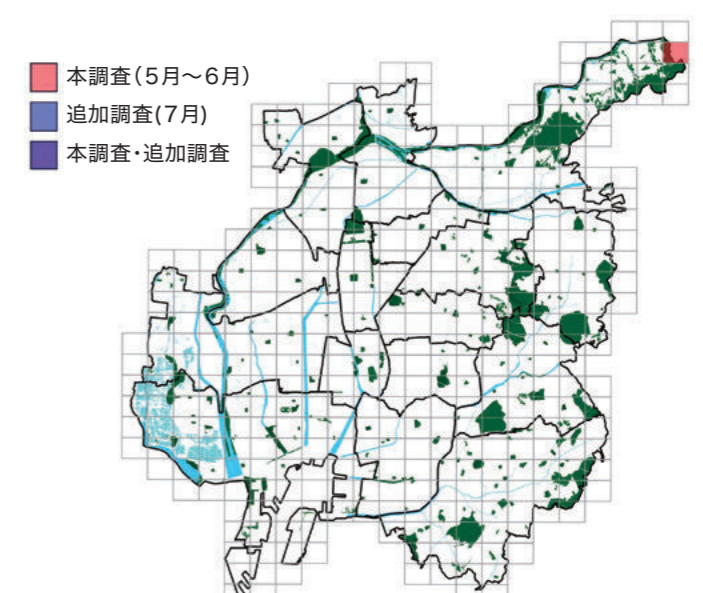
報告地点の周辺環境

d **タゴガエル** (名古屋市版レッドリスト2025 情報不足)

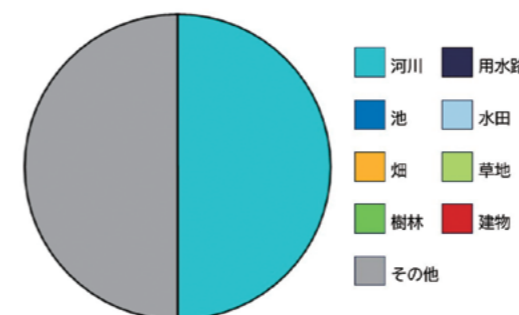
2019年に守山区の東谷山で生息が確認されました。これ以後、毎年鳴き声が確認されており、今回の調査でも報告がありました。溪流中の伏流水の中で産卵が行われるため、地中から鳴き声が聞こえることもあります。市内での繁殖期は4月下旬から5月上旬であるため、今回の調査では開始直後に確認されました。本種は遺伝的にバリエーションがあることが知られていますが(Eto et al.,2012)、名古屋市の個体群は近隣地域の個体群と一致し、ネバタゴガエルと相同であるとされています(島田,私信)。



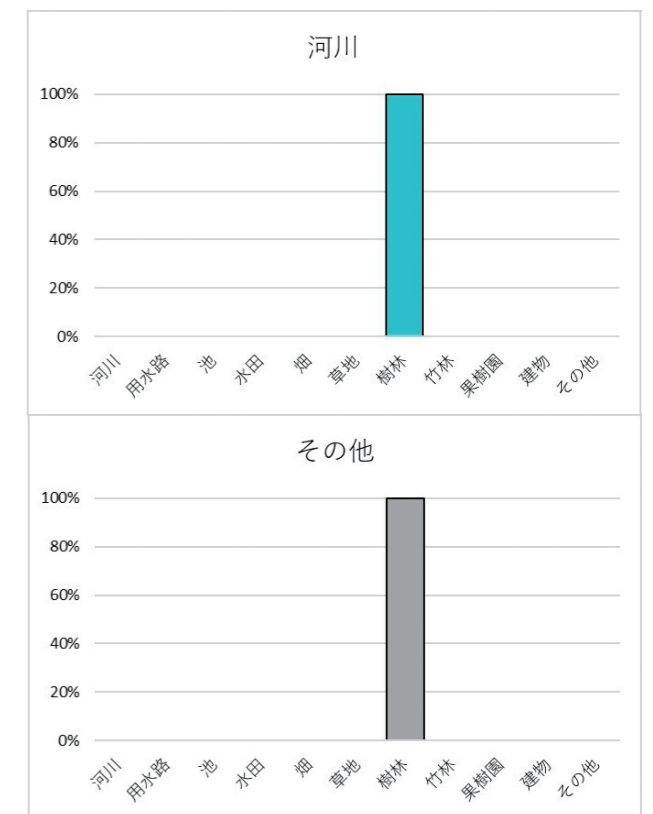
(参加者の方が撮影)



確認場所



※円グラフは報告地点の環境を、棒グラフは報告地点の環境別に報告地点周辺あった環境(複数回答可)を示す。



報告地点の周辺環境

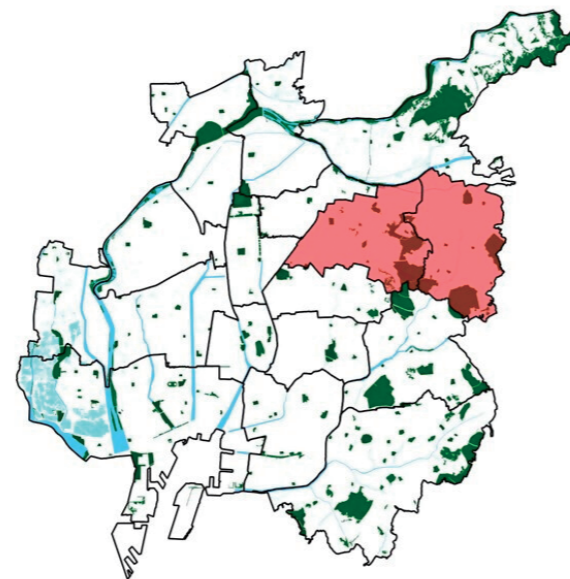
e ニホンアカガエル (名古屋市版レッドリスト2025 絶滅危惧IA類)

アズマヒキガエルと同様に早春に繁殖します。今回の調査期間が非繁殖期であったため、繁殖場所での鳴き声を聞くことはできませんでした。生体が確認されたのは千種区と名東区のみでした。その他に守山区でも生息が確認されていますが、今回の調査では報告がありませんでした。

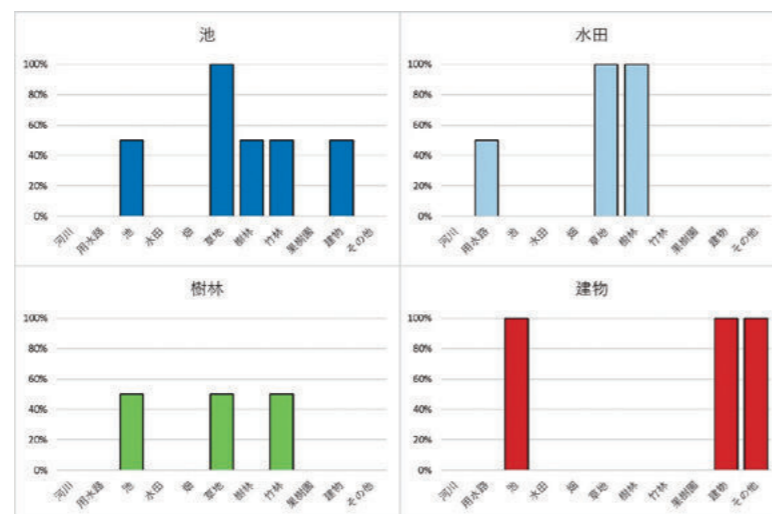
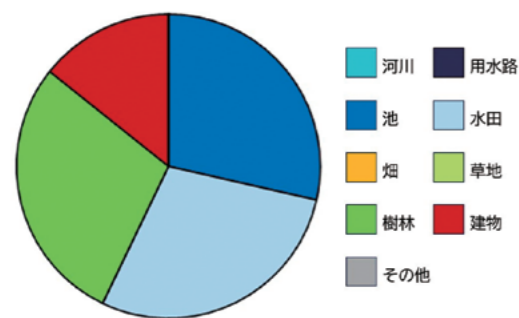
本種は丘陵地などの森林に生息するため、丘陵地に隣接した湿地などの産卵場所が必要になります。そのため、生息地や産卵地は限られた場所になります。



(参加者の方が撮影)



確認場所



※円グラフは報告地点の環境を、棒グラフは報告地点の環境別に報告地点周辺あった環境(複数回答可)を示す。

報告地点の周辺環境

f トノサマガエル (名古屋市版レッドリスト2025 絶滅危惧II類)

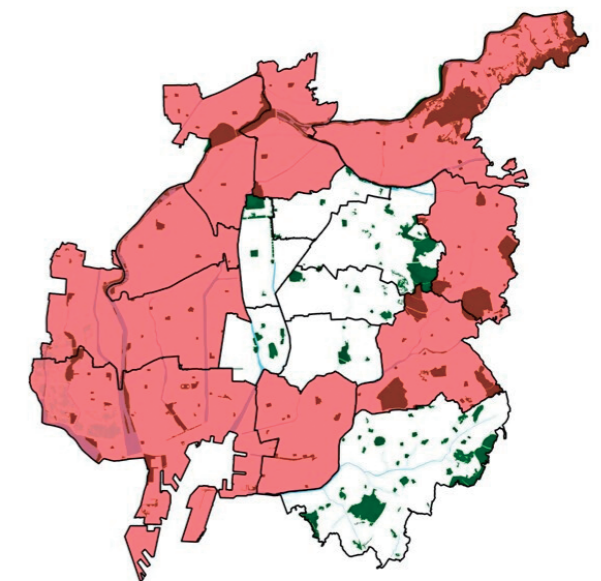
春の終わりから初夏ごろまでの一時期に集中して繁殖するため、この時期は「カエルの大合唱」が聞かれます。本種は「爆発的繁殖戦略」を行うため、一つの繁殖集団でこの大合唱が聞けるのは、短いと一週間ほどです。水田の場合は田植えの時期に繁殖するのですが、水田に水が張られるのを待ち、水が張られた瞬間、一気に繁殖活動に入ります。

今回の調査では、北区、西区、中村区、中川区、港区、南区、守山区、名東区、天白区の9区で確認されました。このうち西区、南区は初確認となりました(名古屋市, 2025)。

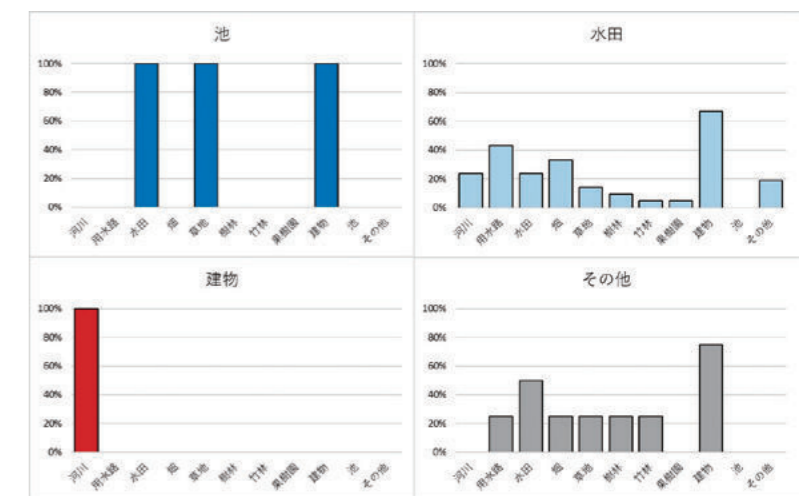
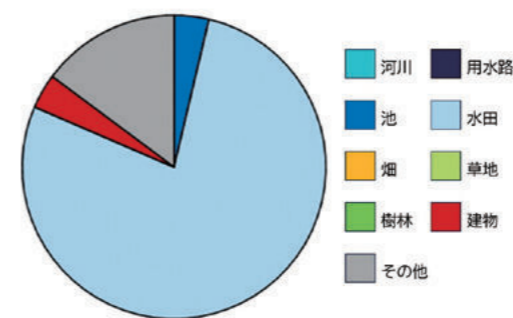
本種の場合、ナゴヤダルマガエルと見た目が酷似しますが、鳴き声は大きく異なります。そのため、鳴き声での同定は確実性が非常に高い一方で、写真での判定が困難であるため、複数人による同定を行いました。



(参加者の方が撮影)



確認場所



※円グラフは報告地点の環境を、棒グラフは報告地点の環境別に報告地点周辺あった環境(複数回答可)を示す。

報告地点の周辺環境

g ナゴヤダルマガエル (名古屋市版レッドリスト2025 絶滅危惧IA類)

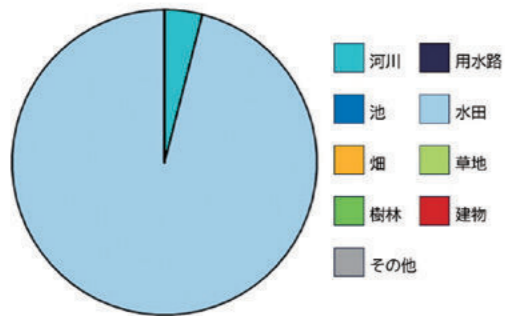
濃尾平野に広く分布していますが、市内の生息は非常に局所的で、今回の調査結果もこれまでの知見と同様のものでした。東区、北区、中川区、港区の4区で確認されましたが、東区以外は水田地帯で、トノサマガエルと分布域が重なっていました。鳴き声での同定は確実性が高く、鳴き声で判断する限り、トノサマガエルとの同所性が伺えました。両種が同所的に生息していますが、各々の繁殖時期は異なります。例えば、両種の繁殖期が本来重ならず、トノサマガエルの方がナゴヤダルマガエルより早く産卵期が訪れ、前述のように爆発的に繁殖活動を終わらせます。その後、ナゴヤダルマガエルの繁殖期が始まり、トノサマガエルとは対照的に数ヶ月間続きます。産卵方法も両種では異なり、トノサマガエルは一度にまとめて卵塊を産みますが、ナゴヤダルマガエルは数十の卵塊で小分けにして産卵します。

両種の間には、交雑が起こっていることも報告されています(光田ほか,2011; Shigeta et al., 2025)。名古屋市やその周辺に生息している個体群では交雑が疑われていたものの、遺伝学的研究解析の結果、交雑が疑われる結果は得られませんでした(名古屋市立大学総合生命理学部 熊澤慶伯 教授研究室 谷川絢香が解析)。

東区では徳川園の中にある庭園でのみ生息が確認されました。同場所では2023年から生息が確認されていますが、移入の疑いがあります。

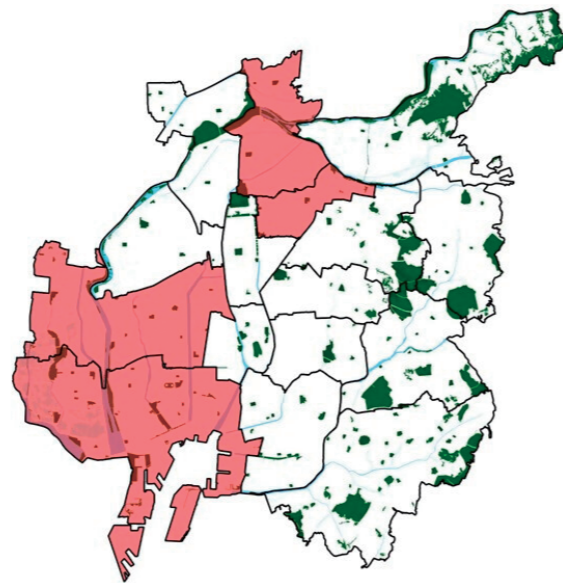


(参加者の方が撮影)

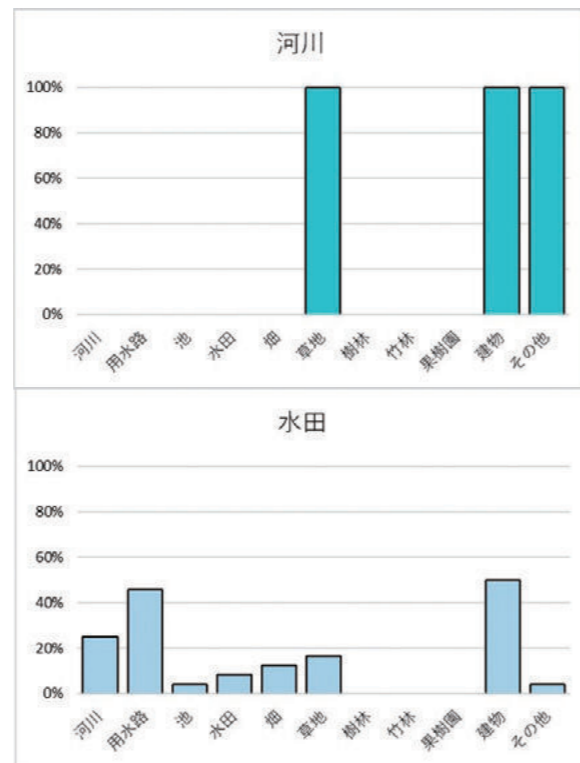


※円グラフは報告地点の環境を、棒グラフは報告地点の環境別に報告地点周辺あった環境(複数回答可)を示す。

報告地点の周辺環境



確認場所

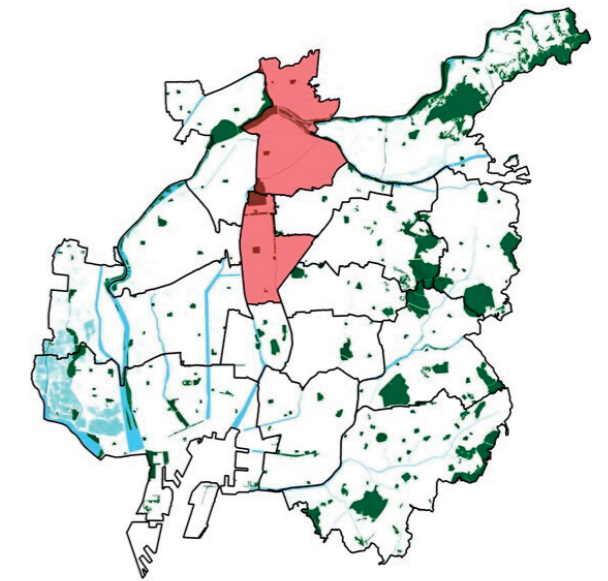


h ツチガエル (名古屋市版レッドリスト2025 絶滅危惧IA類)

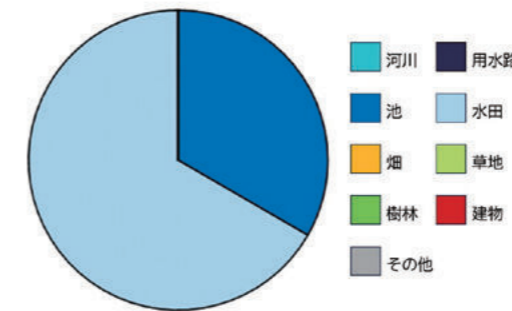
幼生で越冬するため、幼生が生息できる水辺の周年維持が必要です。冬季に乾田化される一般的な水田などでは、生息が困難となるため、生息場所が非常に限られています。今回の調査では北区と中区の2区で生息が確認されましたが、いずれもこれまでに把握されていた場所でした。北区は水田地帯、中区は公園内の人工池が産卵場所となっていました。本種は河川や水田のみならず、人工的な公園などでも生息可能なことが知られています(前田・松井,1999)。中区も、人工的な環境へ適応した繁殖集団が生息しているものと思われる。



(ワーキンググループ撮影、調査期間外、2024年、三重県名張市)

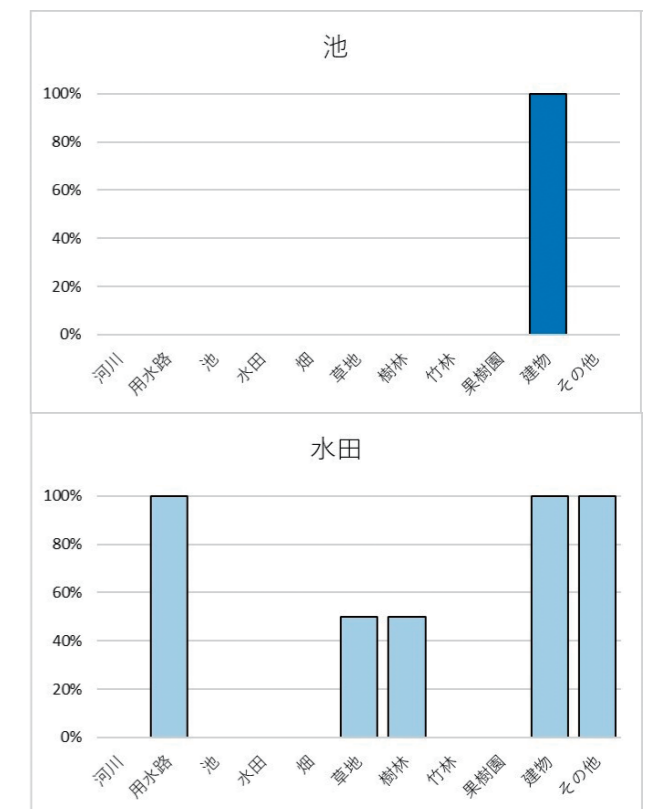


確認場所



※円グラフは報告地点の環境を、棒グラフは報告地点の環境別に報告地点周辺あった環境(複数回答可)を示す。

報告地点の周辺環境

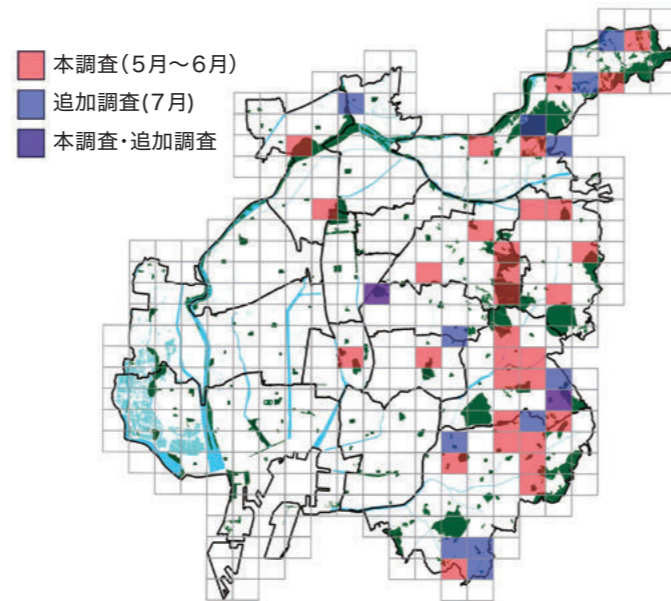


i ウシガエル (特定外来生物)

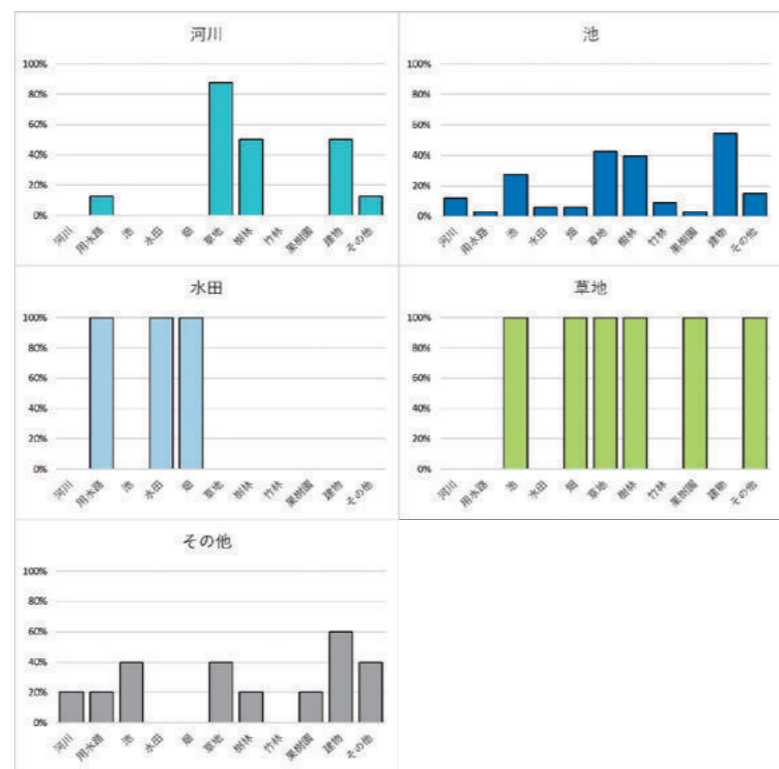
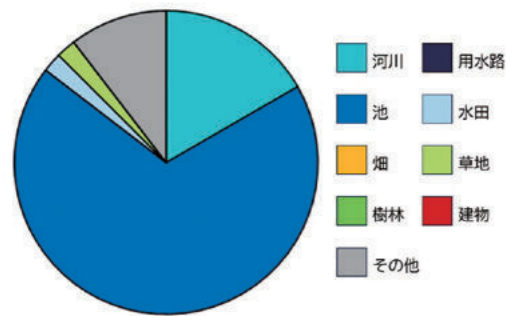
国内全域に生息する侵略性の高い外来種です。生息が確認された区は、千種区、北区、西区、昭和区、瑞穂区、熱田区、守山区、緑区、名東区、天白区の10区で、市内の東側に集中する傾向がみられました。また、追加調査においても多く確認されました。鳴き声が非常に特徴的で確認しやすいにも関わらず、市内全域で生息が網羅されなかった理由は不明です。



(参加者の方が撮影)



確認場所



報告地点の周辺環境

※円グラフは報告地点の環境を、棒グラフは報告地点の環境別に報告地点周辺あった環境(複数回答可)を示す。

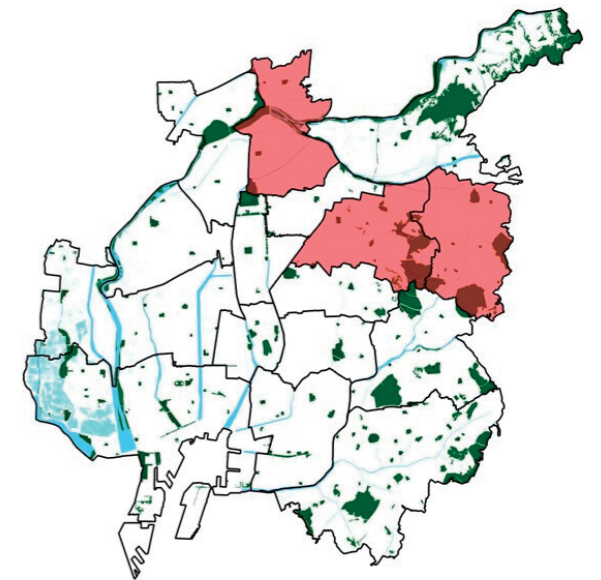
j シュレーゲルアオガエル (名古屋市版レッドリスト2025 絶滅危惧IA類)

本州、四国、九州で広く分布していますが、濃尾平野における分布域は決して広くありません。市内では生息域が局所的なことは以前より知られていました(島田ほか,2015)。今回の調査では、千種区、北区、名東区の3区のみで生息が確認されました。このうち、千種区と北区の確認場所は初記録となりました。また、これら以外に守山区でも生息が確認されています(名古屋市,2025)。

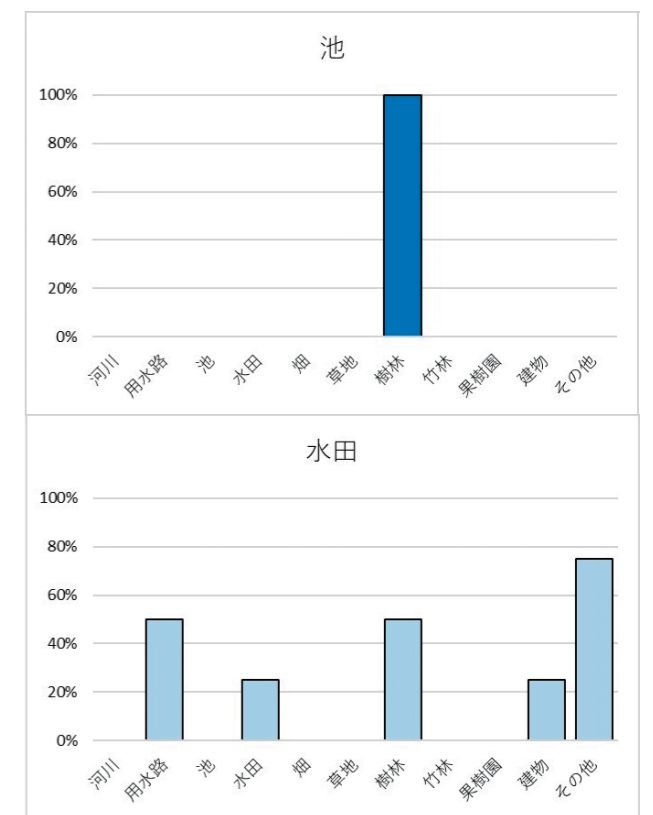
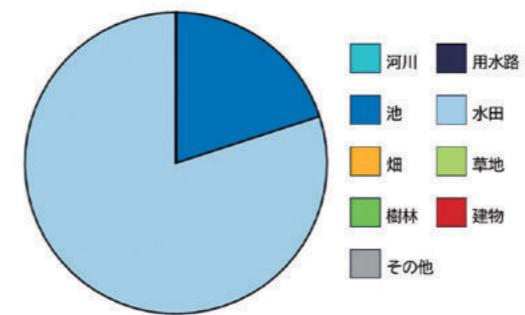
一方、中村区と天白区でも、数年間は鳴き声が確認されていましたが、最近では生息が見られなくなりました。これらは移入個体の一時的な定着を示すものと考えられます。



(参加者の方が撮影)



確認場所



報告地点の周辺環境

※円グラフは報告地点の環境を、棒グラフは報告地点の環境別に報告地点周辺あった環境(複数回答可)を示す。



ウシガエルを食べたことがありますか？

公園の池で、ブーブーと低音を響かせて鳴く北アメリカ原産の外来種、ウシガエル。旺盛な食欲と繁殖力で生態系に悪影響を及ぼすことから2005年に「特定外来生物」に指定され、生きたままの運搬や飼育などが禁止されています。

ウシガエルが日本に生息するようになったのは、別名「食用ガエル」の名の通り、大正6年に水産資源として動物学者の渡瀬庄三郎博士が24匹を輸入したのが始まりです。国は貧困に苦しむ農家の副業として養殖を推奨しましたが、戦時中の養殖場の閉鎖による逃げ出しや、戦後に輸出が再開された後も、農薬検出による輸出量の激減で捕獲圧が下がり、野外でウシガエルが大繁殖することとなりました。それまでウシガエルの声を聞いたことがなかった当時の日本人たちは「池で魔物の声がする」と恐れたそうです。

筆者は数年前、塩尻の居酒屋でウシガエルの塩焼きを食べました。鶏肉に似ておいしかったのですが、現在はメニューから消えています。市内でも以前は提供する店がいくつかありましたが、最近はあまり見かけません。食べる事自体は禁止されていませんが、生きたままの運搬が禁じられたことが影響しているのかもしれない。



3-3 生息地と環境

今回の調査では、鳴き声や写真が記録された地点の環境情報を集約しました(P6 ~ P15報告地点の周辺環境)。今回最も多く情報が寄せられた種はヒガシニホンアマガエルで、次いでヌマガエルでしたが、両種は前述の通り生息分布が類似しています。しかし、確認された場所の環境の詳細を見ると、両種の生息環境比率は少し異なっていました。両種ともに水田に多く生息していますが、ヌマガエルの方が圧倒的に水田への依存度が高い結果になりました。このことから、両種は水田に依存しているものの、ヒガシニホンアマガエルはその他の環境にも適応していることが分かります。ヒガシニホンアマガエルはヌマガエルに比べて水辺環境から離れた場所でも頻繁に観察されることがあるため、このような結果が得られたと思われます。両種の遷移力は高いと思われます。ヌマガエルは河川や水辺を伝って自然遷移するため、河川環境においても割合は低いものの、生息が見られました。一方、ヒガシニホンアマガエルは、建物や畑の割合が高かったことから、水辺から離れられる性質を有していると考えられます。

ナゴヤダルマガエル、トノサマガエル、ツチガエル、シュレーゲルアオガエルの生息環境は、水田にほぼ依存していました。4種は市内ではあまり多く生息が確認されていませんが、ナゴヤダルマガエルは濃尾平野の水田に多く生息しており、他地域でも水田が主な生息場所とされており、市内でも同様の結果が得られました。トノサマガエルやツチガエルは一般に山間部の河川や沼地にも生息していますが、市内にはそのような環境が乏しく、水田以外の環境はほとんど確認されませんでした。一般的に、シュレーゲルアオガエルは水田以外に沼地や池などで確認されず、市内では生息数が極端に少ないことと、環境の多様性が低いことから確認された生息環境も一様になったと思われます。

森林性の種であるタゴガエルやニホンアカガエルは東部丘陵地や市内で最も標高が高い(約200m)東谷山に生息しています。ニホンアカガエルは水田や池環境も産卵地として観察されましたが、森林が必ずセットになっていることが調査結果から見て取れます。タゴガエルでも河川が森林とセットになっていました。

ウシガエルは他のカエル類と違い、市内東部に多く生息が確認されていますが、圧倒的に池環境が生息場所になっていました。人工的な環境にも適応できることから、水田などの水辺環境に依存するのではなく、コンクリートで覆われたため池や用水路などを利用しているものと思われます。

3-4 ポテンシャルマップ

今回の調査で情報が多く得られたヒガシニホンアマガエルとヌマガエルに注目して、ポテンシャルマップを作成しました。確認地点の半径100m内の畑・水田・水辺環境を元に、100mメッシュごとに色分けしました。赤色が濃くなるほど生息している可能性が高く、青色が強いと可能性が低くなります(図4, 5)。

ポテンシャルマップは生息場所を予測する図ですが、両種ともに市内西部と北部の生息ポテンシャルが高い結果となっています。東部には丘陵地帯が広がるため、水田棲のカエルにおいては、このような解析結果が得られたのだと予測されます。注目すべきは2点あります。1つ目は、ヒガシニホンアマガエルとヌマガエルの記録が得られなかった地点でも、生息に適すると考えられる場所があったことです。特に名古屋市の北部・西部・東部丘陵地帯では、ポテンシャルが高いと出た地点がありました。そのため今回カエルが確認できなかったとしても、時期・時間・天候によっては、生息がみられる可能性があります。これは今後、調査を重ねていく上で重要な視点です。2つ目は、市内中心部でポテンシャル上は低く評価されている地点においても、両種が確認されたことです。これらの場所では、公園等に残されたわずかな水辺を利用しているものと考えられます。この事例は、開発された土地でも生息環境がわずかに残っていれば、カエルは生存できる可能性

があることを示しています。今後も市内で広くカエルが生存していくためには、わずかな環境も保全上重要であると考えられます。

今回、残念ながらカエルを見つけられなかった調査員の方も、ぜひこのポテンシャルマップを参考にカエル探しを続けてみてください。

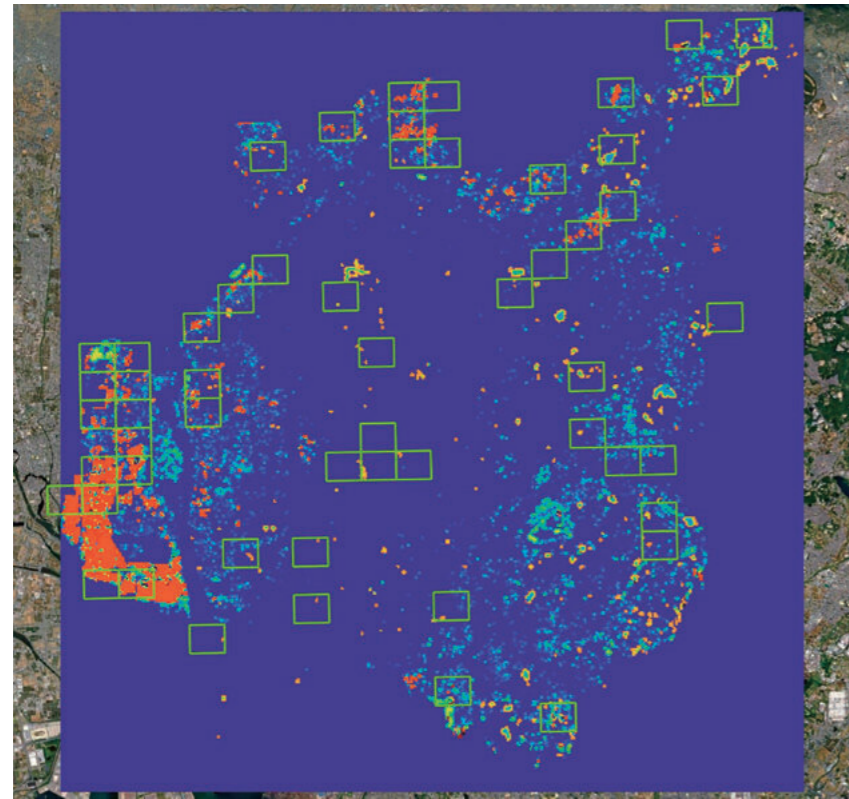


図4 ヒガシニホンアマガエル ※黄緑の口は実際に報告があった地点を示す。

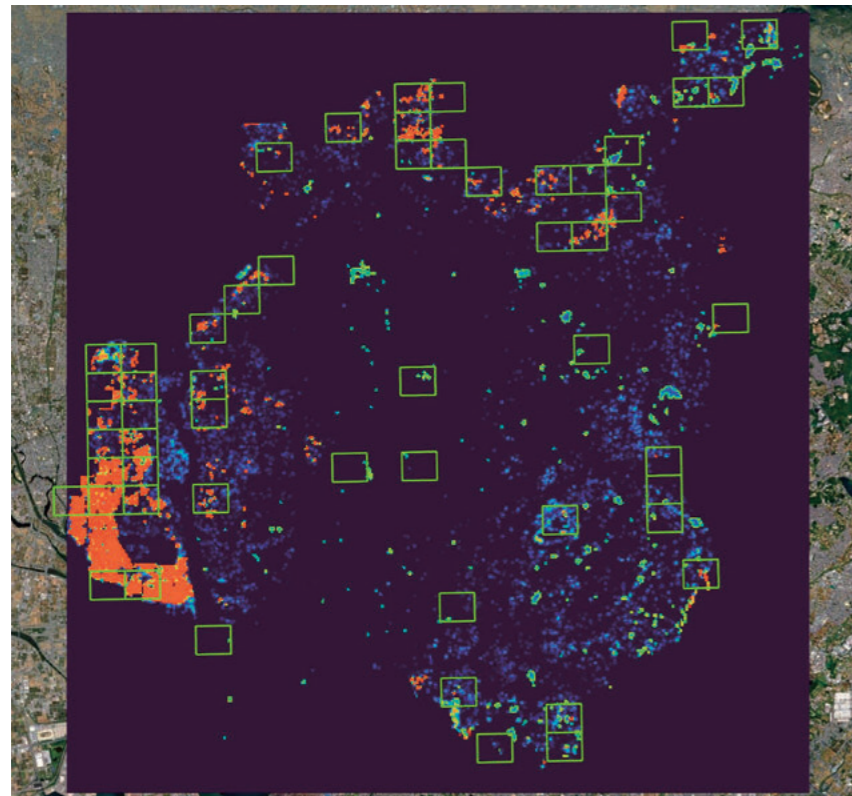


図5 ヌマガエル ※黄緑の口は実際に報告があった地点を示す。

3-5 総合考察

① 分布調査

今回の調査結果で一番意義が大きいと思われる成果は、本調査でヒガシニホンアマガエルの市内の詳細な分布状況が初めて把握できたことです。名古屋市版レッドリスト2025では、「情報不足」に選定されていましたが、ほぼ市内の全域に生息が確認されました。また、プールの水を利用して繁殖が確認されるなど、市内における本種のポテンシャルを確認することができました。今後のレッドリストの改訂の際にも大いに活用される貴重なデータとなりました。また、シュレーゲルアオガエルについても、生息が確認されていなかった地点で確認され、同様に貴重な情報になりました。一方、生息が確認されているにもかかわらず、本調査では報告が上がらなかった地点もいくつかありました。記録をできるだけ漏らさないように追加調査を実施しましたが、参加する期間や人数などに限りがあるため、全てを網羅することは非常に困難でした。また、カエルが頻繁に鳴き始める夜間の調査が必要であったため、参加いただいた調査員への負担も大きかったと思われます。

今回の調査では鳴き声の調査を中心に行いました。カエルが主に鳴く繁殖期は種によって異なるため、鳴き声が聞かれない種が生じてしまいました。繁殖期が調査期間と重ならない種に関しては、幼生や成体などの写真で補いました。アズマヒキガエルは、調査期間が幼生の変態する時期にあたり、変態上陸する前の幼生を確認しました。本来成体は丘陵地や公園などの人里に近い生息地を利用するため、非繁殖期でも成体を確認しやすい種です。今回調査期間外にはなりませんが、緑区で成体を確認されました。市内のアズマヒキガエルは近年激減していることが知られています。成体が普段どのような場所を生活エリアとして利用しているのか非常に貴重な資料となります。このような事例を踏まえ、今後の課題として調査対象種を絞っての長期にわたる調査が必要かもしれません。

② 環境と保全

カエルといえば誰にでも浮かぶ生息環境は田んぼ”と思われる。本州に生息するカエル類においても、一部の種を除き水田はカエルにとって欠かせない生息環境になっています。古来から稲作が盛んで街中以外にどこにでもある水田が、カエル類の繁栄に一役かっているのは間違いのないと言えます。一方、その繁栄が水田に依存しているため、農法や周りの環境劣化などが原因で生息が減る可能性があります。今回の鳴き声調査では、ナゴヤダルマガエルとトノサマガエルは比較的区別が容易でしたが、目視観察では同定が非常に困難になることがあります。捕獲して外部形態を計測して同定する方法もありますが、外部形態と遺伝形態とが必ずしも一致しない事例が先行研究で示されています(光田ほか,2011; Shigeta et al., 2025)。また、田植え時期が遅くなると、本来は異なっている両種の繁殖期が重なって、幼生の競合が激化する可能性があります。さらに、水田に水を張る時期が遅くなると、シュレーゲルアオガエルの産卵にも影響が生じます。本種の産卵時期は3月下旬から4月上旬のため、晩生栽培では産卵時期に水田に水が張られていない状態となり、繁栄の妨げになると考えられます。さらに、本種は畦の土中に泡巣の卵塊を産卵するため、土でできた畦が必須になります。コンクリート化された畦では繁栄の妨げとなり、農期だけでなく稲作の生産環境に大きく影響を受けます。水田とともに発展してきたカエルが、人の営みの変化に伴い減少しているのは非常に皮肉ですが、今後どのように保全していくのかは大きな課題です。

丘陵地を利用しているカエル類は市内の東部丘陵地帯に生息しているため、森林や水辺の管理が重要になってきます。ニホンアカガエルではかつて多くの産卵が確認されていた繁殖集団が2~3年で急激に減少し、現在は絶滅してしまったと思われる場所も存在します。丘陵地帯の森林管理は水や餌資源の確保に必要不可欠であることから、定期的に行う必要があります。

このように、カエル類を保全するには、①水田とその周りの環境②丘陵地の存続が市内の生息地を保全するうえで重要な要素となると考えられます。



カエルの指は何本？

これまで「カエルの指は何本？」と、いろいろな人にたずねてみましたが、正解したのは生き物に詳しいツワモノだけ。一般の人の正解率は0パーセントです。ほとんどの人は、「え？5本じゃないの？」と答え、カエルグッズ好きを自負する人でも、しばらく考えて「3本？」と、答えます。あなたは何本だと思いますか？正解は前が4本、後ろが5本です。これはカエルだけの特徴ではなく、同じく日本の両生類であるイモリやサンショウウオもこの本数です（一部例外はあります）。でも、3本と答えた人を観察不足と責めることはできません。なぜなら、巷にあふれるカエルのイラストは3本指に描かれているものが多いのです。さらには、図鑑の生態写真を見ても3本指に見えるのです。

つまり、カエルの指は「前4本、後ろ5本」だけど、そのうち1本、2本は少し離れて付いていて、体に隠れて見えていないのです。ですから捕まえて数えるか、骨格標本を見るのであれば正確な指の数はわからないんですね。ちなみにイヌやネコは通常、前足の指が5本、後ろ足の指が4本です。なんだか、こんがらがってきますね。



参加者から
投稿いただいた
カエルたち 1

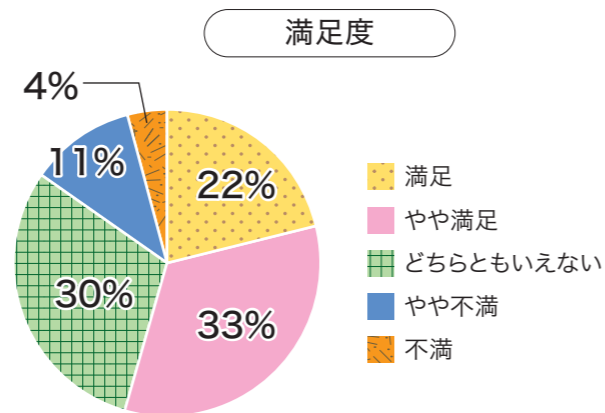


3-6 調査後のアンケート

調査に対する満足度

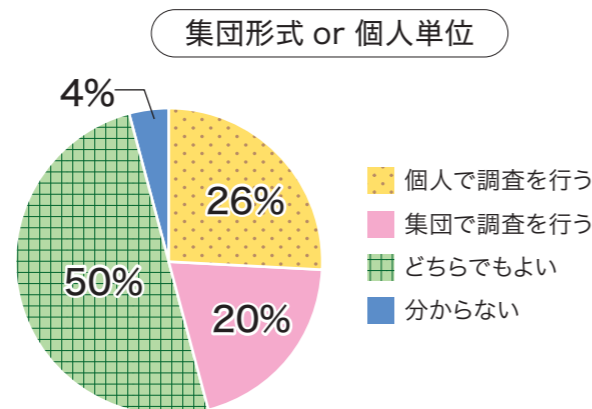
参加者173人に対して調査後にアンケートへの回答をお願いし、70の回答を得ました。

調査に対して22%の人が「満足」、「やや満足」を含めると55%になりました。多くの参加者にカエルの調査を楽しんでいただけたようです。



集団形式か個人単位か

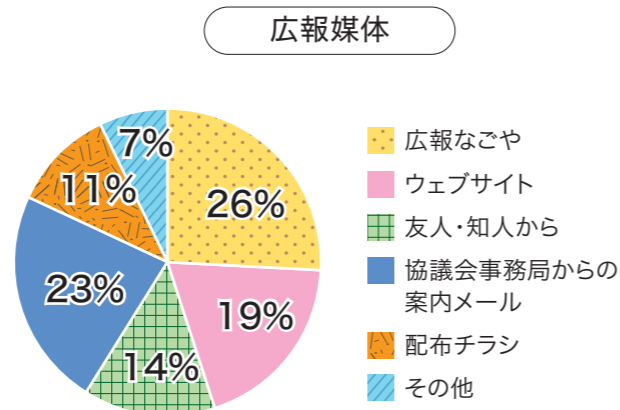
今回の調査は個人単位でカエルを発見できたか、発見できなかったかを報告していただきました。従来の調査方法と異なるため、集団形式か個人単位のどちらが良いか聞いたところ、どちらでもよいが半数でした。



広報媒体について

参加者を広報媒体別に分類すると、今回は広報なごやで知った人が26%と最も多く、次いで、協議会事務局からの案内メール、ウェブサイトで知ったと続きます。

今後も様々な広報媒体を活用しながら、多くの方に参加していただけるよう情報発信に取り組んでまいります。



参加者の声

アンケートでは調査に対する満足度とその理由や「ご意見・ご感想・改善点」を自由に記載していただきました。

満足度の理由

- ・カエルを探すのがとても楽しかったからです。
- ・例年とは異なる方法で、自由に時間を選んで参加できたから。
- ・初めての参加でしたが、カエルがいるか気にして生活出来て楽しかったです。
- ・数年前にはいたはずのアマガエルが消えたことを、再確認することになったので。
- ・名古屋市民として関わられた事がとても楽しかったです。

(アンケートより一部抜粋)

ご意見ご感想改善点

- ・個人単位で参加しても、調査方法や報告方法がもう少し簡単だと良いと思いました。
- ・カエルによってはひと鳴きするとその後なかなか鳴かずに録音できなかった。
- ・集団と個人の両方が方法として可能であれば、たくさんのデータが集まると思う。その生き物がいるところに集団で集まれることで、専門家から話が聞ける機会ができると良い。
- ・カエルが生きられる環境が守られることを願います。
- ・アプリ等で簡単に提出できるように工夫してほしい。

(アンケートより一部抜粋)



オタマジャクシにヒゲがある?!

オタマジャクシの姿を頭の中に思い浮かべてみてください。音符(♪、♪)が「オタマジャクシ」とも言われるように、つるんとした丸い頭と尾っぽが目に見えびますね。ところが、意外や意外!この広い世界にはヒゲのあるオタマジャクシがいるんです!

アフリカツメガエルのオタマジャクシには2本の長いヒゲがあり、なんだかナマズの顔に似ています。この2本のヒゲは、ナマズなどの魚のヒゲの役目と同じく、周囲を感知するためのものと思われていますが、カエルの姿になる時に、尾っぽとともに消えていきます。

日本のカエルは食べる時は目にもとまらぬ速さで舌を伸ばして捕らえますが、成体になっても、一生をほぼ水中で過ごすアフリカツメガエルには舌がありません。水中で、エサを前足でかき寄せ吸い込む姿が可愛いと、人気があります。けれども、日本では、ペットや実験動物として輸入されたものが逸出、繁殖し、太平洋側のいくつかの市町村では対応に苦慮しています。



なごやのカエル図鑑

図鑑の見方

ヒガシニホンアマガエル
Dryophytes leucoradus



絶滅危惧
DD

平均体長：オス31mm、メス35mm
 生息環境：緑地、公園、ため池、水田、畑、庭など
 5～6月の見つけやすさ度：
 鳴く時期：4～7月頃
 鳴き声：<https://kaerutanteidan.jp/images/call/HylaJaponicaIsCallings.mp3>

2025年に近畿より西側は「ニホンアマガエル」、東側は「ヒガシニホンアマガエル」に分けられました。
 自販機や街灯に集まるガなどの虫を捕食しにくる姿が見られることもあります。

市内における分布状況(在来/外来)を示しています。また、レッドリスト*に記載のある種については、そのカテゴリーを表記しています。*名古屋版レッドリスト2025に基づく

生息環境、見つけやすさ度、鳴く時期は、市内での目安です。

見つけやすさ度の見方

: 見つけにくい
 : やや見つけにくい
 : 見つけやすい

カエルについての豆知識

- ✓ 市内に生息するカエルの中には、個体数が激減している種類がいます。調査中にカエルを見つけても、捕獲はせず、見守ってください。
- ✓ カエルの説明は、「日本産カエル大鑑(文一総合出版)」と「WEB両爬虫図鑑」を参考にした上で、市内の状況などを反映させました。
- ✓ カエルの鳴き声は、「カエル探偵団・両生類保全研究資料室」からの引用です。

※ 本資料の無断転載は禁止とさせていただきます。

アズマヒキガエル

Bufo formosus



- 平均体長：オス121mm、メス126mm
- 生息環境：雑木林の残る緑地や公園など
- 5～6月の見つけやすさ度：
- 鳴く時期：3～4月頃
- 鳴き声

<https://kaerutanteidan.jp/images/call/BufoJaponicusformosusIsCalling.mp3>

成体はなごやのカエルでは最大級になりますが、オタマジャクシからカエルになった直後の大きさは最小級です。幼体で見つかる可能性が高いです。
 繁殖のために集まり、取っ組み合う姿(蛙合戦)が、かつては市内でも見られました。

名古屋版レッドリスト

絶滅危惧
IA類

ヒガシニホンアマガエル

Dryophytes leopardus



- 平均体長：オス31mm、メス35mm
- 生息環境：緑地、公園、ため池、水田、畑、庭など
- 5～6月の見つけやすさ度：
- 鳴く時期：4～7月頃
- 鳴き声

<https://kaerutanteidan.jp/images/call/HylaJaponicaIsCallings.mp3>

※リンク先の録音機体の産地は不明です。

2025年に近畿より西側は「ニホンアマガエル」、東側は「ヒガシニホンアマガエル」に分けられました。
自販機や街灯に集まるガなどの虫を捕食しにくる姿が見られることもあります。

ヌマガエル

Fejervarya kawamurai



- 平均体長：オス36mm、メス42mm
- 生息環境：緑地、河川敷、ため池、水田などの水辺
- 5～6月の見つけやすさ度：
- 鳴く時期：5～8月頃
- 鳴き声

<https://kaerutanteidan.jp/images/call/FejervaryaKawamuraiIsCalling.mp3>

平地の水田に多いカエルです。ツチガエルと比べるとイボが少なく、ややフラットな印象を受けます。
 可愛らしい顔をしています。他のカエルを食べたりする貪欲な一面もあります。

在来種



ツチガエル

名古屋版レッドリスト

絶滅危惧
IA類

Glandirana rugosa



- 平均体長：オス41mm、メス50mm
- 生息環境：水田
- 5～6月の見つけやすさ度： 🐸
- 鳴く時期：5～9月頃
- 鳴き声

<http://kaerutanteidan.jp/images/call/GlandiranaRugosaIsCallimg.mp3>



全身が多数のイボに覆われているため、「イボガエル」ともいわれます。ヌマガエルと似ていますが、より漂々しい顔をしています。

現在は、市内に限られた水田で確認されています。

ウシガエル

Lithobates catesbeianus

特定
外来生物



- 平均体長：オス152mm、メス162mm
- 生息環境：緑地、河川、河川敷、ため池、水田など
- 5～6月の見つけやすさ度： 🐸
- 鳴く時期：4～10月頃
- 鳴き声

<http://kaerutanteidan.jp/images/call/LithobatesCatesbeianusIsCallimg.mp3>



アメリカから食用として輸入されました。今では日本中に広がってしまい、市内でも様々な水辺で見られます。

「**特定外来生物**」に指定されており、生きたままの運搬や飼育はできません。

シュレーゲルアオガエル

名古屋版レッドリスト

絶滅危惧
IA類

Zhangixalus schlegelii



- 平均体長：オス35mm、メス46mm
- 生息環境：緑地内の湿地など
- 5～6月の見つけやすさ度： 🐸
- 鳴く時期：4月頃
- 鳴き声

<http://kaerutanteidan.jp/images/call/RhacophorusSchlegeliiIsCallimg.mp3>



声は非常に大きく目立ちますが、上手に隠れて鳴くので姿を見るのは困難です。

水田の畔の土中や水際に、白い泡状の卵塊を産みます。

モリアオガエル

名古屋版レッドリスト

絶滅危惧
IA類

Zhangixalus arboreus



- 平均体長：オス57mm、メス72mm
- 生息環境：緑地
- 5～6月の見つけやすさ度： 🐸
- 鳴く時期：4～6月頃
- 鳴き声

<http://kaerutanteidan.jp/images/call/RhacophorusArboreusIsCallimg.mp3>



市内の個体は、国内の別地域から持ち込まれた「**国内外来種**」です。

シュレーゲルアオガエルより大きく、水場に伸びた木の上などに白い泡の巣を作ります。

ウシガエル

Lithobates catesbeianus

国内
外来種



- 平均体長：オス152mm、メス162mm
- 生息環境：緑地、河川、河川敷、ため池、水田など
- 5～6月の見つけやすさ度： 🐸
- 鳴く時期：4～10月頃
- 鳴き声

<http://kaerutanteidan.jp/images/call/LithobatesCatesbeianusIsCallimg.mp3>



アメリカから食用として輸入されました。今では日本中に広がってしまい、市内でも様々な水辺で見られます。

「**特定外来生物**」に指定されており、生きたままの運搬や飼育はできません。

5. 活動アルバム



カエル観察会



市民水田



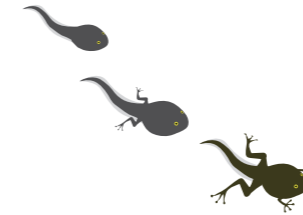
相生山緑地(緑区)



大高緑地公園(緑区)



猪高緑地(名東区)



ウシガエル



シロレーゲルアオガエル



アスマヒキガエル

参加者から
投稿いただいた
カエルたち 2



タゴガエル



トノサマガエル



コラム

カエルを食べちゃう昆虫がいる？

カエルは長い舌を伸ばしてコオロギ、ハエ、クモ、ガなど、自分の口に入る大きさの動くものなら、なんでも食べます。だから虫はいつだって食べられる側。ところが、なんと、「カエルを食べちゃう昆虫」がいるんです！オオキベリアオゴミムシは幼虫も成虫も主にアマガエル(時にヌマガエルも)をエサとします。と言っても、幼虫はムシャムシャ食べるのではなく、鋭いアゴでアマガエルの喉元に食い込んで、アマガエルの体の内部を溶かして吸収します。アマガエルは引きはがそうとしますが、取れません。

食いつかれたアマガエルは数日でしぼんでしまいます。成虫はカエルの^{れきしたい}躰死体があれば、ムシャムシャたべて、あっという間に骨にできてしまいます。まさに「ゴミムシ」、森の掃除屋の^{めんもくやくじょ}面目躍如です。図鑑の分布域には「日本全土」と書かれていますが、田んぼの減少や農薬の影響などのためか、なかなかお目にかかれません。かくいう筆者も実はまだ出会ったことがありません。

けれど、最近の名古屋市内でも捕獲例があるので、いつか幼虫に食いつかれたアマガエルの写真を撮るのが筆者の夢です。



参加者 (敬称略・五十音順)



以下の方々にご参加いただきました。

青木渉、阿知波貴之、安藤正史、飯田一誓、郁翔雄、石川由菜、石谷睦美、伊藤健太郎、伊藤隆之、伊藤瑞基、伊藤佑成、今井洸貴、宇都宮知子、大井章豊、大井善貴、大金咲紅、大金雄一郎、大金由貴子、大島淳、大島友樹、大島史子、大橋孝之、大橋光江、大橋幸奈、大村絵梨子、大村梨穂子、岡安哲史、岡安毅、岡安智子、奥村恵子、奥村淳、奥村建、梶原海都、梶原朔、梶原眞子、梶原大緒、片山由香、加藤颯、川崎智也、川崎由布、キキ・ヌル・アザム・コリル、北澤智子、北澤宗茂、朽名俊翔、熊澤慶伯、小菅崇之、小山蒼真、坂倉可江、佐藤亮太、須江晃大、須江俊介、須江直子、須江文乃、杉原知子、鈴木花恋、高江向日葵、高岡留美、竹内奏乃、竹内舞衣、竹内靖子、谷村圭亮、谷村大典、谷村陽子、谷村李音、田宮真喜子、対馬一輝、対馬知美、対馬颯太、徳升章久、徳升綾乃、徳升咲太郎、永井麻友子、永井律希、中川龍一、中島典子、新美春美、西野勝彦、西野小夏、布目均、野中賢輔、服部充起、服部充裕、原田康行、原田裕子、春田朝陽、春田良美、伴拓哉、伴知幾、ムハマド・ナーファイク・ヒバチュラ、日比野詳子、深谷由美子、福田歩未、福田しのぶ、福田拓未、福田利夫、房村拓矢、房村由里奈、房村璃乃花、房村瑠羽花、舟橋里帆、本田理翔、本田大翔、本田美幸、前野響子、前野圭子、前野朴春、松浦士大、松本愛子、松本圭右、松山暢彦、水野匠、南咲也子、向田美保、向田陸人、山崎真嗣、山田やえ子、山田佑子、山田律子、余郷柚葉、横井敦史、渡邊満知子、渡津昂稀、渡津百々花

調査に参加いただいた市民の皆様、ご協力ありがとうございました。

【引用文献】

Eto, K, Matsui M, Sugahara T, Tanaka-Ueno T. 2012. Highly complex mitochondrial DNA genealogy in an endemic Japanese subterranean breeding brown frog *Rana tagoi* (Amphibia, Anura, Ranidae). Zoological Science, 29: 662 - 671.

前田憲男・松井正文. 1999. 改訂版日本カエル図鑑. 文一総合出版, 東京.223pp.

光田佳代・原直之・高木雅紀・山崎裕治・宮川修一・岩澤淳. 2011. PCRと制限酵素を利用したトノサマガエルとナゴヤダルマガエルの母親系統の簡易な判別法. 両生類誌, (21): 17-22.

名古屋市. 2025. 両生類. 名古屋市環境局環境企画部環境企画課(編).名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや2025 -動物編-, pp.129-142. 名古屋市環境局環境企画部環境企画課, 名古屋.

Shigeta S, Suzuki T, Komaki S, Tojo K. 2025. Changes over a 10-year period in the distribution ranges and genetic hybridization of three Pelophylax pond frogs in Central Japan. Ecol. Evol. 15 (8): e71856.

Shimada T, Matsui M, Tanaka K. 2025. Genetic and morphological variation analyses of *Dryophytes japonicus* (Arana, Hylidae) with description of a new species from northeastern Japan. Zootaxa, 5590(1): 61-84.

島田知彦・田上正隆・楠田哲士・藤谷武史・高木雅紀・河合敏雅・堀江真子・堀江俊介・波多野順・廣瀬直人・池谷幸樹 国崎亮・須田暁世・坂部あい. 2015. 濃尾平野に生息する水田棲カエル類の分布状況. 豊橋市自然史博物館研報 25:1-11.



コラム

筑波山麓男性合唱団

1970年発表、永六輔作詞、いずみたく作曲、デュークエイセスの歌う「筑波山麓男性合唱団」という曲を聴いたことがありますか？筑波山のふもとに住むカエル達を合唱団に見立て、ケロケロ、グワツグワツと歌っているだけの曲ですが、これが何とも心地よく、つい何度もリピートしてしまいます。けれど、歌詞をよく聞くと、あれ？と思う箇所が出てきます。「ベースはガマガエル、グワツ、グワツ」と歌われていますが、実際のガマガエル(=ヒキガエル)は「グワツ、グワツ」とは鳴きません。繁殖期に小さく「クツ、クツ」と鳴くだけです。この声はオスがオスに抱きつかれた時に「ちょっと、ちょっと、ボク、オスだよ、放してよ。」と鳴くリリースコールであることが多いです。川に住むカジガエルも歌では「ケロケロ」となっていますが、実際には「フィフィフィ」と笛のように美しい声で鳴きます。現在のようにスマホで鳴き声を検索できる時代ではなかったので、永六輔さんは、実際には多種類のカエルの声を知らずに作詞したのかもしれないね。

名古屋に住んでいると、カエルの声を聞くのも難しくなっていました。どこかへ出かけた時には、カエルの声を聞き分けてみて下さいね。

